

第762号 ヤスクニ通信 2018年7月8日
日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会

〈祈りのために〉

主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る。主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。

(イザヤ書2章3節～4節b)

6月12日の米朝首脳会談は、70年近く戦争状態にあったアメリカ合衆国と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の最高指導者が直接会うことで共同声明を発表し、朝鮮半島の非核化と北朝鮮の体制保障に向けて新たな段階に進むことをアピールする場となりました。会談の成果について日本では否定的な見方も多く、今後のことも予断を許しませんが、しかし朝鮮半島で当面の間、戦争の危機が去ったことは誰も否定できないでしょう。

昨年の今頃、朝鮮半島は一触即発の危機にあり、核戦争が危惧されるほどの状況でした。朝鮮半島の危機を招いたものに、一方で多くの人権侵害が報告され、個人独裁の国家である北朝鮮の存在があるのはもちろんですが、その国が対峙しているのが世界で唯一核兵器を実戦で使用し、戦争をいとわない超大国であるという現実がありました。米朝首脳会談のためのレールを敷いたのは4月27日の南北首脳会談で、そこで南北の両首脳は、「韓半島ではもはや戦争は起きず、新たな平和の時代が開かれたことを8千万の我が同胞と全世界に厳粛に闡明(せんめい)した」と宣言します(板門店宣言の韓国政府による公式日本語訳)。南と北が「我が民族の運命は我々自身が決定するという民族自主の原則」のもと、朝鮮半島で二度と戦争を起こさせないという決意を表明したことをどんな戦争勢力も阻むことが出来ず、この路線の上に米朝首脳会談があります。またその結果として、日本にとって懸案であり悲願である拉致問題も動き始めています。対話こそが平和な未来を拓くことが明らかになったわけです。そのために渾身の努力をした韓国は称賛されるべきですが、これは文在寅(ムンジェイン)大統領の功績というより、彼を支え、国政に送り出した韓国国民にこそ帰せられるべきものだと思います。2016年冬以来の韓国国民の立ち上がり、ろうそく革命が閉塞状況を突破して行ったのです。「ろうそく革命は何カ月にもわたり1700万人が参加した大規模な市民の行動だったが、初めから最後までただの一件の暴力も、ただ一人の逮捕者も出なかった、完ぺきに平和で文化的な祝祭集会の形で進行された(2017年9月19日の文在寅氏の発言)」。

昨年、日本では米国による北朝鮮への武力行使を支持する意見もありましたが、現実を知らぬ世迷言です。戦争が勃発すれば、日本にミサイルが飛んでくる可能性もあるのですから。かつての日本の植民地支配がもたらしたのも見なければなりません。現在この国では米朝首脳会談の成果について悲観的な見方が多いようで、北朝鮮の核開発問題に対して韓国人の60%が10年以内に解決すると考えているのに対し、日本では65%が「解決は難しい」と考えています(6月19日朝日新聞他)。確かに困難が予想されますが、しかしそこであきらめてしまうなら解決出来ることも解決出来ません。私たちがすべきことは、朝鮮半島の平和とこれが日本を含む東アジア全体に波及することを目指して声を上げ、平和を愛する諸外国の人々と連帯しつつ、少しでも世論を、そして国を動かしていくことではないでしょうか。剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とするのは、何よりイエス・キリストのみわざです。今の歴史的チャンスを生かすことが、神の愛する平和を実現していく一歩となるでしょう。

〈祈り〉

私たちの思いを超えてめまぐるしく動いている世界の中に、神様のみこころを見出すことが出来ますように。その中に、私たち一人ひとりの居場所を与えて下さい。

井上 豊(広島長束教会牧師)

<ヤスクニと問題わたし>

「主の導きのままに」

森崎千恵（浦和教会会員）

1991年11月浦和教会では伝道集会講師として小川武満牧師をお招きし、戦時中軍医として中国で見た数々の日本軍の蛮行と、それに耐えられず脱走した日本兵の命を救われた話を聞きました。礼拝後の愛餐の時、小川牧師は食事には手をつけられず、飲物だけで「総理の靖国公式参拝に反対してハンガーストライキの最中で、これから靖国神社前に座ります」と告げられました。この時自分の信じるところに従って、非暴力で行動することの厳しさと清々しさを同時に感じました。

戦後生まれの私が、「戦争」の実態を感じ取ったのは、高校時代ベトナムで政府に抗議する焼身自殺が続く中、日本に居るベトナム人留学生にインタビューしたことに続き、大学時代はベトナム戦争の最中でしたが、座間の米軍基地を訪ね、結婚後は夫の仕事の担当がベトナムで、戦時下の市民の悲惨な様子を聞いたこと、そしてサイゴン陥落の混乱から夫が一時行方不明になり、アメリカに難民として逃げた人々から直接援助の申し出があったことです。

一方で、東京中会連合婦人会に出席する度に、「慰安婦」問題と取り組む会の報告があり、失礼にも「あら、またあの話だわ。」と思ったのですが、熱心に活動される方々の思いに少しずつ心動かされ、夫が韓国に赴任した折、元「慰安婦」のハルモニに会って話を聞き、韓国への謝罪と和解のために働かれるソウル日本人教会吉田耕三牧師から詳しく戦前戦中の日本の加害について聞く機会を与えられました。またその頃沖縄出身の私の恩師の著書の中で、父上が沖縄弁で娘である先生に呼びかけたために、その場でスパイ容疑で日本軍に射殺されたことを知り、沖縄の現状と重ねて、今もその不平等な扱いに憤り、国家は国民を守らないのではとの不信と、それに対して平和への希求、不戦の思いを強くしています。

それと前後して、中会連合婦人会委員となった時に、日本キリスト教会神学校講師として来日したヘッセリング博士に同行された夫人を修養会講師とし、彼女の論文「アメリカ人から見た天皇制とクリスチャン」を講演のために翻訳したことから、天皇制について詳しく知ることができました。論文では、天皇交代時に引き継ぐ三種の神器や大嘗祭の神道的意味にも触れ、憲法違反が疑われるそれらに対する私たちの判断が問われました。

以上の事柄は時を経て、個々に私に起こったことですが、私には主のお導きとしか考えられず、そこに私に与えられた平和への使命を思わされています。教会の青年からの「何もしないことは、成り行きを認めることになりますよ。」との警告がいつも心の底に響いています。ただ、教会内には、親族が靖国に葬られているために「靖国問題」を論じると親族の誇りが損なわれるように感じる方もおられます。また平和のために積極的に関わらないのは、まるで信仰を計られているようで肩身の狭い思いをされる方もおられます。私は所謂「靖国問題」について、信徒が全員同じ考えでなければならぬということはないと考えます。それは皮肉にもあの全体主義と同じことになりますので、信徒は個々人の立場や思いも尊重されつつ、主の導きに従って平和のために働き、歩めたらと願っています。

東京中会「教会と国家」に関する公開協議会 参加報告

篠塚予奈（東京告白教会牧師・大会靖国神社問題特別委員会書記）

大型連休中の5月4日(金)、東京中会靖国神社問題特別委員会開催の公開協議会に参加した。今回は、午後1時30分から4時まで、いつもの学びの会よりやや長めの時間がとられていた協議会であった。東京中会靖国神社問題特別委員会では、昨年後半から、靖国神社問題発生の最初期から長く取り組んで来られた教職を講師に招いて、靖国神社問題との取り組みを振り返り、改めて確認しつつ、今後、靖国神社問題にどのように取り組んで行くべきかを共に考えるために、特に講演会を企画しているようである。この公開協議会もその流れに沿って企画されたものと思われる。

この協議会では、第一部で、「わたしにとってのヤスクニ問題の総括と宣教の課題としての鍵～教会と国家」と題し、三瓶長寿教師の講演が行われた。講演は四項目の構成であった。

最初に「靖国神社問題の本質」として、「靖国神社法案」が国会に提出された後、審議未了で廃案になるに至るまでの歴史的経緯が語られた。

次に「靖国闘争を戦う神学の構築」として、教会が靖国神社問題に対して、聖書的、神学的にどのように取り組んだかが語られた。

三番目に「靖国闘争から学んだこと」として、講師と靖国神社問題の取り組みについて語られた。講師は「靖国闘争は『日本的なもの』の全否定の闘いであった」と総括をされた。

このため、靖国闘争を行った日本キリスト教会は、日本の人々に語りかけ、よく通じることのできる様な宣教の言葉を失った。だから、この点を日本キリスト教会は正さなければならない。そのためには、「日本的なもの」を全否定する要素があると思われる靖国神社問題でなく、これを教会と国家の問題として捉え直し、新しく展開して行くべきであるということを示唆されたということが、講演全体の主旨であるように思われた。

語られることのなかった四番目は「これからの宣教の課題としての教会と国家(?)」という題が掲げられていた。講演の時間は一時間強と定められていて、講師が用意された8ページのレジメに沿って、全てを語り切るには時間が足りなかった。

10分間の休憩の後、この協議会の第二部として、「当委員会(靖国神社問題特別委員会)の今後のあり方について」全体協議会が行われた。

先ず、講演について出された質問に対するレスポンスの時間があり、そこでの発言の全てを覚えている訳ではないが、「日本的なもの」の把握がどうかということに多くの者の関心が向いていたように思われた。多くの質問用紙が提出されていたが、その全部を取り上げるには、時間が足りなかったようである。

次に、このレスポンスの時とも大いに関わりのある公開協議の時間となったが、「靖国神社問題か、教会と国家の問題か」というようなことが直接語られたことはなかったように思う。「靖国闘争は『日本的なもの』の全否定の闘い」であったのか。靖国闘争の中で時に、「日本的なもの」について、否定的と思われる言葉が発せられることはあったであろう。しかし、「全否定」と言われることについては、さらに検証が求められると思われた。それは今日、またこれからの靖国神社問題との取り組みが整えられることに直結するのではないかというのが、この日、公開協議会に参加した筆者の感想である。

参加者は115名といつになく多く、こうした協議のあり方に対する関心の高さが覗えた。そのため、会場の横浜海岸教会の礼拝堂の席は、ほぼ埋まっていた。

○千葉県弁護士会、自民改憲案に反対決議

千葉県弁護士会（拝師徳彦会長）は18日に開いた総会で、憲法9条に自衛隊を明記する自民党の改憲案に反対する決議を採択した。同会によると、自民案への明確な反対表明は、全国の弁護士会で初めて。・・・決議は、自民党案にある「必要な自衛の措置をとるための実力組織としての自衛隊を保持する」といった趣旨に反対するもの。理由として「憲法の恒久平和主義を著しく損なう危険が大きく、（改憲の）手続き法にも大きな問題がある」とする。（千葉日報5.24）

○国民投票法改正案を了承＝自公

自民、公明両党は25日の与党政策責任者会議で、憲法改正手続きを定めた国民投票法と郵便投票の対象拡大を盛り込んだ公職選挙法の改正案を了承した。国民投票法改正案は駅や大型商業施設で投票できる「共通投票所」の設置を可能にすることなどが柱。（時事通信5.25）*憲法改悪の下準備は着々と進められている！

○安倍靖国参拝違憲訴訟・東京控訴審、突然の審理打ち切り・結審強行

6月6日（水）、同訴訟控訴審の第2回口頭弁論において、東京高裁・大段亨裁判長は突如として審理を打ち切り結審し、次回期日（10月25日）を判決言い渡しとすると宣告して法廷から逃亡した。・・・訴状提出から1年近く棚上げ状態に置かれた控訴審の第1回口頭弁論が持たれたのが、この4月27日。控訴理由書において、最低最悪の「安倍忖度判決」といべき1審判決に対する全面的な批判・反論を加えた控訴人及び代理人は、第2回口頭弁論を迎えて、これからその主張を立証し、事実を明らかにしていく実質審理が、本格的に開始されるものと期待していた。しかし、大段裁判長は、9月にわたる被控訴人に対する求釈明を「釈明の必要を認めない」と切って捨て、靖国神社現地の検証申請や、元最高裁判事を始めとする学者・専門家証人、さらに控訴人本人の尋問について、その採用を却下した。そしてその後、突如として「これで結審します。判決言い渡しは10月25日13時30分」と宣言したかと思うと、席を立って法廷を後にした・・・（安倍靖国参拝違憲訴訟の会・東京の抗議文（6月8日）から）

○主基斎田90年祝い舞う 福岡市早良区脇山でお田植祭 児童が記念式典で披露式典の後、学校近くの水田で児童と地元女性ら約60人が着物、菅笠姿でお田植え舞を踊った。・・・多くの市民が見学した。（西日本6.17）*昭和天皇即位時選定

○古式ゆかしく手植え 緑川 主基斎田でまつり（四国6.18）*大正天皇即位時選定

○明治神宮鎮座百年に向け 悠紀国（*山梨）で白酒奉納を計画（神社新報）*明治天皇即位時選定 *天皇代替わりに向けて、草の根の天皇賛美と光栄感情が仕込まれている。

（編集後記）

靖国問題は、戊辰戦争以来、特に植民地支配と侵略戦争の責任を踏まえた東アジアの平和構築に密接に結びついている。

「祈りのために」はその重要な視点を想起させてくれる。官僚だけでなく、検察や裁判官まで安倍政権に忖度。日本は形式的民主主義独裁国家の腐敗が進行している。日本キリスト教会は沈黙してはならない！

祈りのために、森崎さん、篠塚委員の文からは、教会内での多様で、率直な議論の必要性が伝わってきた。感謝。（K生）

762号ヤスクニ通信 2018年7月8日 発行 日本キリスト教会 靖国神社問題特別委員会 発行人 古賀清敬 編集 桑広国 発行 桑広国（大和教会） 〒242-0021 神奈川県大和市中央 7-1-22 TEL&FAX 046-261-3957
